

論文概要の和文様式

雑誌におけるタイトル: Variation in men's dietary intake between occupations, based on data from The Japan Environment and Children's Study (JECS)

和文タイトル: 男性における職業間の食事摂取の違い

ユニットセンター(UC)等名: 福岡UC
サブユニットセンター(SUC)名: 産業医科大学SUC

発表雑誌名: American Journal of Men's Health

年: 2018 月: 6 (オンラインで掲載)

筆頭著者名: 田中 里枝
所属UC名: 福岡UC

目的: 職場での生活時間が長い労働者にとって、職場は食生活を改善するのに最適の場所である。しかし、詳細な職業ごとの食生活の違いは明らかにされていない。本研究では日本職業分類大分類を用いて職業を11グループに分け、職業間の食事摂取の違いを検討した。

方法: 20歳から65歳の38,721人の労働者(エコチル調査の父親参加者)を対象に横断研究を行った。食事摂取は食物摂取頻度調査票を用いて評価した。職業は日本職業分類を用いて11のグループに分け、職業グループ間の食事摂取状況(食品群・栄養素)を分散分析と多重比較により検討した。また、食事摂取基準の達成状況について、管理的職業従事者を対照としてロジスティック回帰分析により検討した。

結果: 食事摂取状況は職業ごとに異なり、特に保安職業従事者と農林漁業従事者で特徴的な食事摂取傾向が見られた。特に保安職業従事者では乳類、カルシウム摂取が高く、農林漁業従事者では漬物類や塩分摂取が高かった。農林漁業従事者では管理的職業従事者と比較して飽和脂肪酸からのエネルギー比率と食物繊維摂取量に関して食事摂取基準の目標量を満たす傾向にあった。

考察:(研究の限界を含める)

職業間の食事摂取の違いを解釈するには、社会経済的因子に加え、職業に関連した様々な因子を考慮しなければならない。保安職業従事者や農林漁業従事者における食品群・栄養素摂取の決定因子として身体活動量やヘルシーフードへのアクセス等が関与している可能性を考察した。本研究の限界として、1) 対象者を妊婦の夫に限定している点、2) 日本の労働者全体とは異なる職業分布の集団である点、3) 欠損データが結果に影響を与えている可能性、4) 質問紙調査の限界、5) 職業群内での詳細な職種の違いが結果に影響している可能性、6) 横断研究の限界等が挙げられる。

結論: 本研究では職業を11グループに分け、職業群間の食事摂取状況を比較することで、新しい知見(保安職業従事者や農林漁業従事者の食生活状況等)を得た。本研究結果は個々の職場における食生活改善に貢献することが期待される。